本市では、情報や情報手段を適切かつ効果的に活用し、問題を発見・解決したり自分の考えを形成したりするために必要な資質・能力である「情報活用能力」の育成に取り組んでいます。また各小中学校では、端末活用のスキル向上だけでなく、情報モラル教育など、情報社会で安全に生活するための端末の適切な利用についても、発達段階に応じて指導しています。今後も、デジタルとアナログ、それぞれの良さをいかした学習を進め、子どもたちが自分に合った学び方で学べるよう、端末を活用する場面も自分で判断し、必要に応じて活用できることをめざします。



◀１年生の先生から依頼をうけ、タブレットの使い方を１年生に教える６年生たち。



◀ログインの仕方やデジタル時間割の見方などの操作方法だけでなく、個人情報を守ることの大切さも伝えています。

～自立した学習者を育てるために～

変化が激しく、答えが一つではない課題に向き合う社会を生き抜くためには、子どもたちが自ら目標や計画を立て、試行錯誤しながら学びを進める「学びの自己調整」が不可欠です。これは、学習の過程（見通し・実行・振り返り・改善）を子ども自身が主体的にコントロールする力を指します。各学校では、この力を育むための多様な実践が進められています。またそれに伴い、教員の役割も「知識を教える人」から「学びを支援する人」へと変わってきています。計画の立て方や調べ方・まとめ方といった「学び方」を指導するとともに、「何ができたか」「どこでつまずいたか」「次にどうするか」を子どもたち自身が振り返り、改善していけるような場の設定や、ていねいなフィードバックを行っていきます。

― 生成AIは「学びの自己調整」を支える伴走者 ―

近年、文章の作成や情報の整理、アイデアの提案などを行う「生成AI」が急速に普及しています。これからの社会では、仕事や生活のさまざまな場面で生成AIを活用する機会が増えることが予想され、生成AIを避けて生活していくことは難しくなると考えられます。だからこそ、子どもたちが生成AIと適切に関わる力を身に付けることが重要です。

文部科学省は、生成AIを「人間の学びや創造性を支える道具」としてとらえ、単に答えを得るために使うのではなく、情報を吟味し、自分の考えを深めるために活用することが大切であると示しています。学校現場でも、探究学習でのアイデア出しをはじめ、自分の書いた文章や考えを練り直す「推敲（すいこう）」の相手として、また自分の学習状況に合わせてアドバイスをもらい、学びを自分で調整・改善していくための手段として、活用が始まっています。

―主体的に使いこなす力を育てる―

生成AIを活用するうえで大切なのは、提案された情報をそのまま受け入れるのではなく、「内容は正しいか」「根拠はあるか」を自ら確かめ、自分の意見と比較して判断する力です。AIの客観的な視点を活用しながら、最終的には自分自身で考え、学びを深めていく姿勢こそが「学びの自己調整」の核となります。また、AIが得意な作業と、人間にしかできない対話や協働、豊かな感性・創造力を組み合わせる視点も欠かせません。各学校でも、生成AIの便利な点だけでなく、その限界や注意点、個人情報・著作権の扱いについても正しく学べる機会を設けています。

時代が変化しても、学びの主体はあくまで子どもたち自身です。自らの学びを調整し、可能性を広げる伴走者として生成AIを正しく使いこなすことができるよう、取組を進めていきます。



生成AIにヒントをもらいながら、自分で書いた（入力した）英文を修正していきます。

生成AIを相手に、英語で対話の練習を行っています。

※ 学習活動に合わせて、事前に教員が生成AIの設定を行っています。



～ おわりに ～

社会で生きて働く資質・能力を身に付け、児童生徒が学校教育のみならず、大人になってからも、実社会・実生活の中で重要な役割を果たすことができるよう、香美市では「探究」を軸として、「自立した学習者」の育成に向けて、小中学校９年間の学びをつなぐ取組を推進していきます。

～学力調査の実施～

	全国学力・学習状況調査
対象	小学６年生、中学３年生
教科	(小) 国語、算数 (中) 国語、数学、英語
質問紙	学習意欲、学習方法および生活習慣等に関する事項

４月に**「全国学力・学習状況調査」**が全国一斉に実施されました。この調査は、子どもたちの学力や学習状況を把握し、学校での授業改善に活用したり、家庭などと協力して子どもたちの生活を見直したりする目的で行われています。

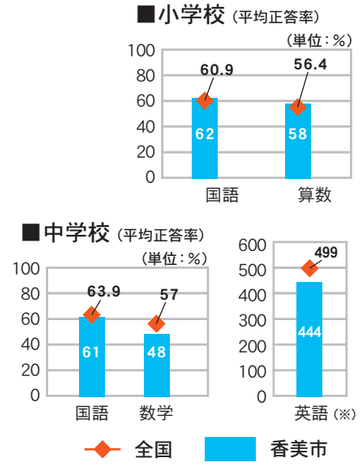
香美市教育委員会ではこの結果を受け、各学校と連携し、学力向上により一層取り組んでいきます。また、この調査結果に示された香美市の子どもたちの学力の現状についてお知らせします。

～調査結果～

香美市の結果は右のとおりです。

今回の調査結果をもとに、市内各校が組織全体で、P(計画)D(実行)C(評価)A(改善) サイクルを循環させながら、継続的な授業改善を推進していきます。

今年度も市内のすべての学校が「学びを変える取組(授業改善)」と「働き方改革に関わる取組（校務の情報化）」を二本柱として取り組んでおり、それぞれの学校で得られた実践事例や成果については、公開授業研究会や各種研修会等を通じて互いに共有し合い、市内全校に広げています。特に「学びを変える取組」では、児童生徒一人ひとりに応じた個別最適な学びと合わせて、課題の設定から情報の収集、整理・分析、そしてまとめや表現に至る一連の「探究のプロセス」を重視しています。このプロセスの中で、ICT端末を効果的に活用することにより、子どもたちの思考をより活性化させ、主体的・対話的で深い学びの実現につなげていきます。



(※) 中学校英語は、IRTスコアで示されています。
IRTは項目反応理論 (Item Reaponse Theory) のことで、国際的な学力調査などで採用されている、異なる問題から構成される試験・調査の結果を、同じ尺度で比較することができるテスト理論を指します。

～ICTの効果的な活用 意識調査より～

社会の急激な変化により、予測困難な時代と言われるこれからの時代に、力強く対応する力を育成する要となるのが「探究的な学習」です。第２期香美市教育振興基本計画でも、基本目標１に「探究的に学び、社会を生き抜く力をもった人の育成」を掲げています。ICT端末は、この探究的な学習を支え、広げると言われていますが、GIGAスクール構想も６年目を迎え、端末の活用も日常化してきました。

右のグラフは、児童・生徒が回答した意識調査の結果です。「できると思いますか？」という問いに対して、全項目で強肯定（「とてもそう思う」）の回答が全国平均を上回っています。

また全国調査の分析で、「ICT機器を活用する自信がある児童生徒ほど各教科の正答率・スコアが高い」という傾向が示されています。本市の小学校での調査結果でも、「文章作成」「情報収集」「情報整理」の項目で同様の傾向が見られました。これは単に、端末の操作が得意だからではなく、目的を持って情報を集め・整理し、考えを深めながら自分の言葉で表現する力が身についているからであると考えます。こうした日々の積み重ねが、確かな学力の向上へとつながっています。

